
Scientific Approaches to Language No.1 March 2002

はしがき

2001年（平成13年）4月に発足した神田外語大学大学院（言語科学研究科）言語科学研究センター（Center for Language Sciences: CLS）の紀要『Scientific Approaches to Language』第1号を公刊できることを幸いに存じます。

当研究センター（CLS）は、本学大学院が平成8年度から平成12年度までの計5年間文部省の中核的研究拠点(COE)形成基礎研究費の助成を受けて行った、人文科学と自然科学を統合した国際的な研究拠点を築くことを目的としたプロジェクト『先端的言語理論の構築とその多角的な実証』（研究リーダー：井上和子）の研究成果と研究体制を基に設立されました。先のCOEプロジェクトでは、人文科学的な見地からの「言語」に関する研究を核とし、理論構築とその実証という形で人文科学と自然科学を対等に統合した研究の促進を目指して、独自の基盤を形成しました。自然科学に補助的な役割を人文科学に求める一般的な風潮の中で、両分野の密接な共同研究のお蔭で、言語理論研究のみならず、言語習得研究、脳科学、言語の機械処理などそれぞれの分野で独創的な研究が進み、成果を上げました。

新しく発足した当研究センターは、これらの成果を踏まえ、COEプロジェクトにおいて中核を担った言語の記述的、理論的、実証的研究に加え、本学および本学大学院が外国語大学としてその教育と研究の中心に掲げる言語教育と学習についても、その理論を深化させる研究を含め、人文科学と自然科学、社会科学の諸分野の枠を越えて、「言語」を横断的に研究することを目指しています。すなわち、CLSは、幅広い視野と確固たる視点を持った言語研究の拠点として、言語理論の観点から言語の本質に迫る研究、全ての言語研究の基盤となる記述・実態調査研究、ヒトの認知活動を視野に入れた言語理論の実証研究、言語学習の現実に迫る言語学習理論の構築、などに従事し、理論的研究だけでなく、理論に裏付けられた応用研究を追求することで、幅広い対象に対する第二言語習得に関して実質的な提言を行うなど、社会的な貢献も期待できると信じています。

CLS紀要第1号である本号は、8編の論文を収録していますが、言語理論に関わる研究としては3編が含まれ、長谷川の論文は日本語の主要部内在型関係節の統語分析を通して意味役割認定のメカニズムを整備し、井上の論文では日本語の格と後置詞の交替現象を扱い、格の表出における概念意味構造と統語構造の関わりを考察しています。岩本の論文では、日本語の空間表現のアスペクトを概念意味論の観点から分析しました。実証研究としては、COEプロジェクトからの継続で日本語の疑問詞疑問文の解析実験結果を分析したMiyamoto and Takahashiの論文があり、記述・実態調査研究では、木川の論文が、日本語の東西方言の境界として注目すべき地域の特色を方言分布の観点から考察しています。第2言語学習理論の観点からは、母語との比較で、Horibaが読解と記憶の関係を、Watanabeが書く作業（writing）とそのインプットとなる文章（source materials）の関係を考察しました。また、斉藤の論文は、言語文化学をヒトの言語能力と運用システムから位置づけ、それを「もう一つの言語学」として確立させる議論を展開しています。

CLSの初年度となった2001年度は、萌芽的な研究成果やこれまでの研究成果の充実といった研究が含まれていますが、今後着々と創造的な発展を遂げることができると期待しています。

本号をまとめるにあたっては、表紙のデザインから論文の書式の作成、執筆者との連絡、論文取りまとめを一手に引き受けて下さった本学大学院博士後期課程満期退学の藤巻一真さんと、印刷所との連絡を含め細かな事務的な作業を短期間で効率よくこなして下さったCLS事務担当の椎名千香子さんの献身的な作業がなければとても刊行までには至りませんでした。感謝します。

2002年3月

言語科学研究センター・顧問 井上 和子
言語科学研究センター・センター長 長谷川 信子

長谷川 信子
主要部内在型関係節：DP分析

黒田 (1999) は主要部内在型関係節を外在主部を持たない名詞的文とする分析を提示したが、本論文では、その鋭い洞察は認めるが、その分析では解決できない問題点を指摘した上で、主部内在関係節はIPを補部にとるDPとして分析する。そして、内在主部の意味役割認定には、主要部Dからその補部（および補部が支配する要素）に向けたDP一般に必要な意味役割素性の「一致」操作が適用されるシステムを導入する。この「一致」による意味役割認定操作の存在は、英語などの主要部前置言語の考察からだけでは明らかにならないが、日本語などの主要部後置言語ではその作用が表面化する。そして文の埋め込み構造としてのDPがIPを取る構造は、内在関係節だけでなく補文の構造としても表出し、その構造の存在が内在関係節に見られる「一致」操作を可能にするのである。このことにより、本提案は、主部内在関係節の分析だけでなく、内在関係節は主要部後置言語にしか見られないという事実への説明も同時に提供する。

YUKIE HORIBA(堀場 裕紀江)

The Effect of Task on Comprehension and Memory of L1 and L2 Text

The study reported in this article examined the effect of task on comprehension and memory of L1 and L2 text. Eighty-four college students who were enrolled in a first-year English course read two expository passages under three different encoding conditions, read for surface forms, read for meaning, and read for critique, and later recalled the content of the texts. It was found that a significant amount of variance in recall of L2 text was accounted for by task as well as by two other factors, comprehension skill (reflected in recall of L1 text) and language proficiency (indicated in the scores for a standardized English language test), though task was not an explanatory factor for variance in recall of L1 text. These results suggest that cognitively demanding task may have a compounding effect of processing difficulty for L2 text comprehension which is also influenced by comprehension skill and language proficiency.

井上 和子

能動文、受動文、二重目的語構文と「から」格

生成日本語文法では、「が、を、に」を格助詞とし、「から、で、へ」などを後置詞として区別し、両者の関係について注目することはなかった。本稿では、次の例に見られる「から」と「が、を、に」との交替現象に焦点をあて、最近の文法理論での格の扱いにたいして問題を提起し、解決の方向を示す。

- 「が」 / 「から」 : 母親 が/から 私に着物を送ってきた。
- 「を」 / 「から」 : 子供たちが門 を/から 出た。
- 「を」 / 「から」 : 湯気が薬缶の口 *を/から 出ている。
- 「が」 / *「から」 : 学生たち が/*から 老教授を尊敬している。
- 「に」 / 「から」 : 老教授は学生たち に/から 尊敬されている。
- 「に」 / 「から」 : 私は父 に/から 大金を貰った。

問題

- 日本語では、何故「から」名詞句が主語として認可されるのか。(a)
- 非動作主語の場合は、「を」は使えず、「から」のみが許容される(b,c)
- 能動文主語に「から」が許されないのに、受動文では「から」が用いられる。(d,e)
- 日本語では受け手主語を持つ授受動詞文に「に」と「から」の交替が見られる。一見これに対応する二重目的語構文が英語では許されない。(f)

これらは、最近の文法理論の一致現象を基にした格の扱いでは解決できない。そこで語彙概念構造での動詞による後置詞の吸収という仕組みを提案する。

岩本 遠億

日本語空間表現のアスペクトについて

This paper investigates aspectual properties of spatial expressions in Japanese within the framework of Conceptual Semantics that incorporates the atomic aspectual features, rules of construal and structure preserving binding. Pointing out the problems with Kageyama and Yumoto's (1997) taxonomic conceptual analysis of spatial expressions, I will propose a unification-based Conceptual Semantics that explicitly defines conceptual function application. There are two types of change of location events: Some are interpreted as result states when accompanied by a frame adverbial such as mikka kan (for three days) or the aspectual formative te-iru (Progressive), and others are not. The difference is attributed to the ingredients of their

Paths. When the Path consists only of the final location and nothing else, the event is interpreted as a result state. Otherwise it is not. Frame adverbials and te-iru are COMP (composed of) and CR (cross section) functions, respectively. When applied to a change of state event, they require a rule of construal introduce the PR (projection) function. The principle of function application states that PR applies to a single identifiable cross-section. The grammatical and interpretational difference is explained by the principles of conceptual computation without an ad hoc stipulation.

木川 行央

方言分布から見た大井川・安倍川流域－大井川・安倍川流域言語地図から－

大井川・安倍川両流域は、日本語の東西方言の境界を考える上で、注目すべき地域である。両河川とも江戸時代には橋がなく、また船での川越えも許されていなかった。また、大井川は、遠江と駿河の国境となっており、明治時代以降も郡の境界となっていた。本稿では、この地域において行われた言語地理学的調査の結果から、この地域が方言の分布の上からどのような特色を持っているのかを考察したものである。その結果、従来の報告にもあるが大きな障害となるであろうと予測される大井川自体はほとんどの場合境界とはなっていない点、安倍川の支流である藁科川流域と大井川中・上流域に共通する現象が認められる点、大井川流域は、静岡市井川地区と本川根町の境界、川根町と島田市・金谷町の境界という二つの地形の上での境界が現在の方言の分布の上でも境界になることが多いという点、さらに下流域においても行政区画の境界が現在の方言分布の境界と重なることが多い点等が確認された。

EDISON T. MIYAMOTO(宮本 エジソン)

SHOICHI TAKAHASHI(高橋 将一)

The Processing of Wh-Phrases in Japanese

We propose that in-situ wh-phrases in Japanese and fronted wh-phrases in languages such as English are processed in a similar manner despite their configurational differences. Three self-paced reading experiments are reported supporting the view that in-situ wh-phrases require the prediction of an upcoming question particle (QP). Because of working memory restrictions, readers expect the QP to occur at the earliest position made available by the grammar. The evidence is based on typing mismatch effects (TME), which are similar in a number of relevant respects to the filled-gap effect observed in English. A TME occurs when a potential position for a QP is filled by an affirmative complementizer and as a consequence slow reading times are observed because of the discrepancy between the interrogative typing expected and the affirmative typing imposed by the complementizer. The TME only occurs in positions in which the grammar allows a QP to license a prior wh-phrase. Furthermore, the TME is observed even when it is clear that there is another upcoming position which can hold the QP.

斎藤 武生

言語文化研究の方法と課題（1）

言語文化研究の在り方を問題にしようとする場合、まず問われるのが「言語文化」とはなにかという問題である。「言語と文化」とか「言語の文化」など、関連して考えなければならない問題もあるが、本稿では、今日の理論言語学の言語観との関係で、言語文化とはI-言語によって生成される言語表現(linguistic expressions)の意であるとする考え方を提案する。脳内に表示される言語表現は直接目にはできないが、目に見えない世界に実在(reality)を見ることで言語文化は科学としての立場を主張するものである。言語文化研究によって言語表現に潜む文化的特質を明らかにしようとする場合、最も確かな証拠を提供してくれるのは、運用システムを経て生み出される言語表現の表れ(manifestations of linguistic expressions)である。人間の生き方とのかかわりで研究を推し進めようとする言語文化学は「もう一つの言語学」を主張することになる。

YUICHI WATANABE(渡辺 雄一)

Providing Source Materials in Second Language Writing Assessment Tasks: What Does It Do?

This article examines issues surrounding the use of source materials in writing assessment tasks. By reviewing relevant literature in first language and second language writing research, it first outlines potential benefits and problems of providing input materials in writing assessment tasks. Then, it discusses four aspects of student texts that are deemed important in evaluating source-based writing. The four aspects are content (origin of ideas and development of ideas), organization, function of integrated source information, and format of incorporated source materials.